



~14
4424
14





特
4424
14

七月号

5 29
13/221

ついでに

萩原

工

二六新報を入る

明治三十七年の初春の上

狂瀾の如く

自己中心明治文壇史

工見水陸

六六

明治三十七年一月元旦より自分は二六新報
に入社して、毎日神田通新石町へ品川から通
勤する事と成つた。
旧臘に突然堀京山が訪ねて来て 今度二六

2 I

只此の事。
 一は、川上音二郎政争の場合には、一應自分の了解を得て上りて世に任じたい。(当時二六日は函館を脱して、事毎に川上を攻撃して来た。既にオセロ開演の初日は、開演が公約より一分遅延したと云つて食ひ掛つた程で有つた。)

幸に双方とも容認されて、月俸は百円、他は十円の赤字を附け、といふ事で、早速入社之辭を送る事になった。眉山の事が前日に出た。自分のな。

では文士を招聘して、新機軸の編輯を試みる。就ては貴君と川上眉山とを自分は推薦したのだから、山といふ話。これは、山の手で有つた。

~~眉山の新聞及び雑誌記者~~ 自分は断念してあるので有つたが、生活の困窮苦から脱したいから、^{其條件の}但し条件附きで有つた。

一は、文士としては眉山と同様である。けれど、記者としては自分の方が経験を有するから、月俸はイッテでも好いが、必ずしも餘分は

A 10 20 青い三阿麻紙用紙

工

十五萬五千八百七十五板)社長は松山定輔で、
料を毎日、紙上、於て公表するん。元旦は
この頃の二六日は旭日冲天の勢を、發行部

めて ~~通勤~~ した。

併し、年末の入社を断たり、新年の初

披露、及び聲高の驚きあり。

観察し、結果あるぞや。げ甲二六新報
社に入る、如何の其手腕を揮ふのを見よ。
如何の其思想を發くのを見よ。長所を見
よ。短所を見るべし。以上、我と我を
披露する聲高の驚きあり。

No.

号

其手腕は如何。鈍を揮つて新を割るが處
あるべし。其思想は如何。土器の中の貝
殻、實はコロボツクルが吸物すて、三
十歳の昔は盡きたりと知るべし。其長所
は如何。吊り一方、暗に上手技を遣る
りや。其短所は如何。餘り多く、譽ぐ
るに耐えず。其跡者は如何。孔有る古泉
の十番、九八番までは取揃へたり。其地
質は如何。雲を攫むが如し。其性格は如
何。水の流る、が如し。以上、我と我を

A 10 20 善い 三河海産物誌

No.

4 I

支配人 ~~小野~~ 小野頼不二人。編輯

總務の福田和五郎。編輯顧問の行越三郎、

其他幹部格では中村彌、末永純一郎等。論議

の福本日南が匿名で寄稿。(後、長井行(金

風)も入社した)

硬派記者として、川島清次郎、奥澤泰岳、

黒田湖山、他元半之助、工藤鉄男、関口一郎、

佐藤克巳、中村壽二、中村樂天、其他。

軟派記者として、堀紫山、岡鬼二郎、山本

柳葉、岡村栞紅、万代花舟、股部露峯、そ

A 10 20 青山 三阿部新聞

No.

唯一の婦人記者として、竹内まさ女(後、
伊藤銀月の嫁したる妻あり)

編集部長、長原孝太郎、小林清親、小嶋沖

舟ぶりがいる。(自分は子供の時の清親のお

んが繪を親しんでゐる)で、長身の同僚を以

て、社で初めに見 ~~何となく可憐にかつた。~~

三面外交部には多士済々で、野澤枕城が副主任で

後、利喜松、太田茂、木内禎一、吉豊次郎、
澤田撫松等々々。(守田有秋は自分より前、在社より、其頃見えてゐる)

副支配人 ~~秋田清~~

其頃見えてゐる

No.

5-I

としいか知
社まとも
時と顔を出すの程度は過ぎふかつた。

以上の顔解の他は、小波、思素、鏡花、葵
山、秋声、風景、普庵、寧衛、春葉、録雨、

宙外、柳原の十二文士を、社友として、大い
三百美文を登壇、~~村松~~、~~村松~~、~~村松~~、~~村松~~、~~村松~~、~~村松~~
を討つ陣立で有つたが、社告びけを実行と見
ふかつた。

二六では三井改組の次第、岩谷松平退位
の成功し。新年の日は、郡司大尉の報效義會

A 10 20 書目 三四五

筆誅
掛つてゐる。

伊藤侯と團基

明治三十七年の初春の下

硯友社は、^{其首領の}紀業を失つたりと、併し、社員

團結は却つて凝固を成つて、その親睦のたより

一月九日、箱根塔之澤の環翠樓に、新年會

を開く事となり、小波、思素、^{桂舟}柳原、^{三浦}春心(三百子)

其他で一泊旅行を試みる。

その時、環翠樓の裏の三階神代閣には、

6 I

伊藤博文侯（まだ公爵ではない）が、
西の風雲の急変の際、いざよひ所、
都門の塵を避けてゐる。

他の二階は川上君二郎が貞奴を召喚し、
花を伴つて静養をさせてゐる。

牧野の一行は、伊藤侯のゐる二階の直ぐ下
の金庫へ、殆ど徹夜で馬乗騒ぎを始めたが、

見えてゐるのだから、少し静かには成りま
せんが、と警告は及んで、静か
の聲が解くと、静か

A 10 20 昔の別

仕ようはふいふ、伊藤侯上巻の西洋酒を
用意してゐる。そのころ、

ひ物に下つたら、自然に飲めは酔ひつづめ
て、~~鐘まわりの知らせ~~と、いふ様子を自分が見

入らぬ、~~その早業~~取寄いだが、冗談の
ふり、女中も洋酒を半打、~~半打~~届けてゐる。

翌朝、川上が来て、江見さん、あなたのこと
はオセロの關係で、~~伊藤侯~~は能く知つてゐる。

が、どうです、碁の相手は、皆さんと一緒に
押し合はるんか。あ、伊藤侯はヘタで、

7 I

聞いてるんので、岡田(三子)が、大層健康
 脚と聞きすーんが、その日は何の意味でも
 飛べますか。と問ひ掛けられ、信野は軽
 く笑って、ナニニ(逃げる)時の替りぢやよ。と
 云つて、可笑い大笑。
 信野は、^{小島}一六翁の息子と云ふ、^{かろて}書の
 許が出るのをキツカケ、一回揮毫を請ふぢが、
 自分も最初を書いて下さつた為書きは、水隠
 と有るん。それで自分は、インキヨの隠の字
 では有りません。カゲと云ふ蔭の字です。と

三 五

昨夜の洋酒の禮、^{おん}一同で三階
 へ押掛けた。
 昨夜は甘^ガお喧しく帰る(さうさう)。
 先づ自分の口を切ると、信野は、^{苦笑}
 イヤい、君達が騒いで、前の流の声
 には及ばんよ。と見事は一蹴された。
 信野は前日、^{六十三歳の老練}塔の峯の、^山下駄や穿きで
 二十餘町を、
 駈登り、弾指の石や煙を酔臥して、
 A 10 20 青い三阿原紙原裝

No.

アエ

全然
 眼中に無いので有らん。
 その序でとりふりて、
 書り一枚書りたれ。それは孤叙何々といふ
 りで有らんが、自分は傳やと
 はウマク通りますね。と云つた、信翁は
 微笑して、(巡査)は返答がたよ。と云ひ
 ながら、筆を持つて、(信翁)は立ちたれ。
 其は殆ど知らぬと同然の自分は、川上は
 何んぞか、(信翁)の(書)の(置)き
 さい。歴史は成りますよ。と云はれんが、

三つと、別々一枚を請ふれぬ、今度草冠
 の無い陰の字を書いたれ、三度書き直さ
 ざるの、(信翁)は思つたが、(相)密(子)をせんが、
 草冠のある蔭の字でお願ひします。と依頼
 せ。
 す、(信翁)は不興うへ顔で、エライ、宣し
 い事を、(信翁)は、と云ひながら、(信翁)は
 傍庵の三字を頼る、(信翁)は、今度のは
 属水蔭詞伯、(信翁)は、(信翁)は、
 要する、(信翁)は、水蔭といふ文士さんの
 唯、お貞夫の(信翁)は、
 才也口を脚色したる者にて、
 頭腦は有らん。

大相撲 坊師が一月十三日、西国回向院で開つた。大砲梅ヶ谷常陸山の三横綱、荒岩、国見山、逆鉾、両国、そのまゝ新進の太刀山、駒ヶ嶽とつゝ、大力士名力士揃ひの黄金時代で有つた。(梅常陸初めの横綱)

二六 山は相撲通の傍に新があれ。そのまゝ私山は大の相撲好きで、梅ヶ谷目録買ふりも有つた。編輯は自分の雑誌観を書くべく毎日出張する様とついで、秋山の横敷は小さく成る毎日見物した。力紙と題して、其雑誌

戦争文学

明治三十七年の春の上

青い三河原野

イキナリ是日の風鈴を掛けた。二三手を合せ、ひまひま、日あけす。と云つて引下つた。あきり上手で、いとつゝ、道の伊藤公、目風鈴を置いたのは、自分以外は無かつた。斯ういふ出来事をも、一頁は於て新聞記者は、自分は新聞材料とせず、放棄しやうとあきらむ。一月十二日の二六、紙上、伊藤信と文士と題して長々と報道した。

観と書いん。

一月三十日、神田鑑治町今金の橋上(元は有名な、^{い、い、い、い}、^{い、い、い、い}、^{い、い、い、い}、^{い、い、い、い})は有名な水石幻花が茶起で、奇癖會と云ふ考古採集趣味者の會を聞いた。非學ぶ盛會で來觀者も百餘名もあつた。

大黒板十種(佐藤桂園)古代柳板十点(村田幸吉)浄土双語録(山田春塘)古鉄園係品(三上花林塔)九留類(林若橋)古鉄類(龜田一照)人形及び煙管

A 10 20 第三回展覽會

10 I

板十種(清水晴風)古鏡製劍(竹内久一)名所圖會(大橋徳笑)古新聞(石井研堂)パイプ、人形書(武内桂舟)至類(堀野文録)

以上が主要な出品で有つた。

二古^可は相争の眉山、病氣と稱して全然出社せず。自分も雑誌書きでは詰りぬと思つてゐる。際、第四面の廣告欄に入つた倍受り小説が必用と云ふので、それを受持つ代り、毎日出版社の足らずといふ事を、二月三日の紙

11 工

上ツト 荒就鳥の爪痕と云ふを角燈子とい

ふ変名で連載と成つた。卷中より旧姓景山の

福田英子らしい女傑を取入れたのを英子の

抗戦を出したふどの論議も有つたが要する。

之は佐治の著者又大塚で有つた。

然るに日露間の平和は破れよ、いよ、仁川

沖の海戦と成つた。新聞と悉く武裝的編輯

と変つたが、堀松山は自分の軍事小説は新航

路を開いてゐるのを知つてゐるのだから、堀松山が

小野瀬や福田の語り、二二の、自分の軍事紀行

小説を連載する事になった。

A 10 20 青い三河原宿四巻

小説を連載する事になった。

自分は既に、社員としての義務は『雑誌』の

方で果してゐるから、軍事小説の方より原

稿料を要求してゐるから。そこで二月十二日

の朝上、水雷艇の行方、といふ讀切編を

を載せてから、毎日殆ど不休で軍事紀行を

書きつゞけた。(十月まで、百三十種)

之より先、宣戦の詔勅の發行、大岡本某

雨の細竹で、郁文舎の朝野某の來て、戦争

小説と題する雑誌發行を計畫し、すべて

三 五

12 I

四月十五日第一號を發行した。それは政府

明治三十七年の春の下

兩路探事件

その二十三日は日進春日を、三月一日は大海戦と、錦水、天仙、佐東、秋衣、花舟、誓月、醉夢、玄川、美佐雄等を、挿画は山中古洞、青崎英朋の二人であつた。

編輯を自分の一任すべしといふので、快諾した。編輯は古澤天仙とさうり、執筆者は江水社總動員といふ事を、八日、神田開花樓に梅野の宴を開いた。この景氣が江水社の基本金をこころえあけられ、何の噂かあるといふ噂思ひ有つた。東京目黒町の河合牛肉店の裏の出入りの二階を編輯のとして、毎日の所へ自分は寄つた。第一篇は職員令の總名代の下、各軍事雑誌を書いて、十五日は既發行し

A 16 50 三三三

心工

編輯局へ願を出して。
 僕ア露探がヤアふいんわ。と悲憤の声を
 張上げてるん。
 社長名義で時止しなりのかつん。
 三階の大層間で大會議が開かれふどしん。
 其結果、三百を任(今の)社(會)部長の重任が自分
 の頭ノツカツて来ん。其前社長室で松山
 は自分言ふ事云つん。
 文士さん僕の中は無い。尾崎の時
 然ったが、君もって其通りん。君が

No.

五

竹田の扱方日ニ六は堅直さあて、前は何の
 の事件で裁判は法日成るを(社説が)出さつ
 んとんでいづれ其宣告と同時に發行禁止の
 運命で有つんわ。併し、然るん内情は
 自分は觸れてるんかつんので、一寸も驚か
 ざる筆は福田が止して、末永純一郎が成り、
 間もなく中村強がうつん。小野順の隠居し
 て、社の實権は松田清が移つん。
 松山定輔を政界から其サるべく、露探とい
 う悪名を着せんのはけ時分有つん。松山は

A 10 20 書に 三回 露探 松山

No.

14 I

三百を任して働いて是れを事を備はす希と
する

社難の今日、文士を文士として優遇せんか
して居るものと云ふん意味が言外に透れてゐ

それで自分は
と云ふ重任ですら、私には勤まりたいと

思ひます。と云ふん。ハッキリ辭意を表はす
程強くは言ひ切らぬか、つんのは、大戦争中

又他人してはと云ふ生活苦の多、餘程奉制

A 10 20 昔の三河屋紙店製

さらそるんが有つん

今、君が引受けて居るものと、又ゴ
タ〜と倒れり、矢張り筆鏡して置

いて是れ給へ。と政事家のヒツタリ打切つ
て、直ぐと三階の大會議に臨んで有つん

この翌日、自分は三回外交記者
餘名 編輯部にて
と云ふんし會議室を集めて

今日から不肖が三百を任と成つん、それな
併し、二回新聞の爲である。自分の眼は
新聞あるのみで、社長、松山定輔の爲で働くの

この難局に當ると
いふ事、

No

No

151

記者としてはいさだか通用していません。と正
 り、侮辱しん言を浴せしむ事を、其場
 である万代花舟の、自分後で聴いてるん
 だー其紅葉 ~~の~~ 自分 ~~の~~ 猪
 秘園の眼中には見られぬ無い者ぶりが。つ
 まり記者としていさだか落第点の文士、それが
 合せるといへば三回を任と成り、秘園其他を指
 揮する事、将に溜飲三斗であると同

交部長

~~何れか~~

文士としていさだか ~~の~~ 知りせんが、新聞

No

五

さい事は勿論である。それと同様に、諸君の眼
 中より江見水蔭のある答はあり。すべて私情
 を捨て、新聞 ~~の~~ 忠告を働いて世をなす。と
 大見得を叩く。
 この演説は評判が好い。だが、自分が
 斯う云つたのは、多少他の意味も含めてある
 けり。有る。それは故紅葉の復讐 ~~の~~ 事。
 叶挿話の次の如くである。
 紅葉が入社して、何の難報を書いたかの書
 の、それよりいさだか ~~の~~ 時、秘園徳生 ~~の~~ 三回外

A 1020 青山 三河屋藏書

No

16 I

6

（前畧）昨日午前九時三十分本所構網町
一丁目十七番地金澤タケ方の寓居にて長
（中畧）前夜枕頭を侍せる馬

○齋藤緑雨氏逝く

緑雨の死が報じられてゐる。（次の如し）

二六新報の最後の日（四月十四日）は齋藤

の三銃士を譯して連載する様子を成つた。

最初には杏西散人といふ人の譯文を修正を加

へる程度が、それでは氣に入らぬ、眉山自

らで翻譯するに至つた。

時、併し然るに私怨の爲に公的の新聞事
業を怠慢にする事、是れは双互の不得策であ
るといふ知り、前夜四時大見得を切つたの
で有つた。
それは好かつたけれど、聞かぬと事務総少
の爲に外交郵員十数名を誣首する事となり
其宣告を自分からして口を止るといふに至つた。
迷惑の上り無しで有つた。（その誣首の中は
今では文壇に盛名を馳せてゐる人である。）
二六新報の第一號から、川上眉山の「ゲーム

A 10 20 青い三箇面紙記号

No

No

五 一 平

17 I

6
号

場孤蝶を願ふ予 予 最後の筆を執り
ぬふと嘆し(五七廣告文)と口頭を述
べりりつ尚け書二通を作り一は二六新報
社に送り一は幸徳秋水君に送りぬふ備
の遺言唯是のみと従容とて死の幕の垂
るゝを待たり斯くて昨朝九時の至り甚所
に水汲む音を耳して家人を呼ぶ末期の
水を飲みぬしとて快く一椀を傾け盡して
又一語を發せず眠る如く大往生を遂げ
ぬ(中略)氏は病中知人の語つて予は是

A 1020 書山 三河新聞原稿

No.

6
号

近諸同人の種々厄仗を掛けぬは死後ま
で厄仗を掛けぬふしてぬふ予死ふは
二三人一人知れぬ葬りぬふとの言あ
り然るが故昨日の如き幸田露伴馬場孤
蝶等四五人の如き棺を收め本日午前五
時ハ葬場へ送る都合とし葬儀は当分行は
す(下略)
明治文壇史上特殊地位を占有しぬる奇才緑雨は正しく
提燈行列の亦文

四月二十五日 出社の途中で藤澤清三郎に出會

明治三十七年九月初五日

(今の文士の葬儀は
は比べて、自らは
は文を草一つは
泣いた)

No.

進軍の巻として出版の手筈で、初版の大
 部転を印刷した外が、日清戦争の水雷艇
 の様子は当分の間。
 つまり自分が餘り多く軍事小説を書き過
 ぎるよりもあつた。その二社の方が多
 忙な心、郁文余の方は云仙の筆を、今を
 引いれ。
 二六社の方は、自分三回を任の下、国鬼を
 郎、山本柳葉、岡村祐紀とソノ立派な文士が
 あらうにけんど、鬼太郎は、鬼太郎と軍人の記

有つて、
 軍事小説家として自分は最得意の時代で
 右陽との編輯事業が、と武蔵の短篇を
 送り、又二六の車載五十二篇一編
 めりして、武蔵の巻と命、博文館か
 ら出版して、五月十一日
 ころのときは引つゞき、二六のを履き

事は私のガラに有りません。他の方でイシ
ラ、その働きをする。と北が打ち。柳葉
の方は、後日、電善の秘密。と、特別種の
方の全力を盡す事を成つた。柳葉、ま
す女、花舟の三人を相手。可成り自分は若
戦。と。

奇異なる職業。といふ。三回外文を讀
つて、調べたり。紙上の遊者。といふ。欄を設
けて、名士、学者、力士、藝人、男女を問
ひ、各々方。といひ、涼味の有る談話を。

A 10 20 青い 三四五 紙張

細い。世談話者の中。は、徳川慶喜、大
島圭伏、或は守田宝丹、橋本雅邦、

と思へば、ブラックもある。梅ヶ谷、常陸山、
坪井博士、肝付將軍と、次ぎの次ぎと

を愛へる。は時代の新聞。と、は、
は異彩を放つ。といひ、

の編輯は、是非難。といひ、
受け。今日の新新聞は、より以上難談化してある。

稻荷の改名

明治三十七年の夏、秋、冬

23I

越さうと成るへ陣幕橋所は取りこめずも
りふのせし家内が一見しむりりて、自分は見
ず轉で引移るん。

土岩石番が一着厄いふ新給ふりて、同居の
中陰、林り二人の他は、西村醉甚るり午傳
つて世をくそ、一々今運びしむりてあつるが、
その酔者今日の人類学者も成るうとは、
全く思ひも着かぶらうん。

八月十七日の日二六をいふと、旅順陥落
は東は某家二養子を行つてあるん。

八月十七日 旅順陥落

を見越して、記念號を發行し豫告が出てる。
正に其如く容易に旅順は陥落するものごと、
誰ぞが信じてるぞ、自分は、その旅順兼取
りの軍事経緯を、挿画を入れて、活字を組ま
せて置くん。電報が通し次第、そのをソック
リ出すつもりである。後々考へると
大層難で、そののまのまの四ヶ月餘り掛つたの
で有るん。
眉山の日三銃士は不評であり、又
八月二十五日で前編を終り

不 五

No.

No.

24 I

自分は忙中の中、右遺跡研究は決
 してやる。下総、常陸方面へ探検
 に出掛ける。併し、露探検が出来る、行先々
 で探検の密偵を附せられぬのは弱く
 すぎん。
 十月十六日、東京人類学会の遠足会
 がある。下総堀ノ内具塚へ百餘名と昔に出掛
 けんが、同行者、坪井、小金井、雨野、土の他
 三條基弘、徳川頼倫、同達孝、蜂須賀、昭、若の輩、
 旗連、加、若、若、泥、若、成、若、有、若、

No. _____

六 五

其後、小杉天外の日にせ此を連載する
 事、成らん。天外は、驚風志風の当り、
 所謂小説で流行兒である。
 これより先（六月十八日）第四回の俗
 小説として、これをや行燈として、の連載
 してある。これは雨柳子の名で、三宅青軒の書
 いてある。自分紹介して、此の之が評
 判が、好かん。茶の平内を書き出し
 此は、是又大堂りといふ。その場で青軒
 入社した。（後、一寸自分の代り、三百を任
 成、若、無能といふ。直さ、止、若、）
 三宅青軒 著 110 三宅青軒 著

No. _____

エ-I

記
 幸が
 前
 後
 十月二十九日、
 新聞の一周忌
 様
 有る
 の
 こと
 常識の上
 判断して
 秘山を
 伺
 い
 け
 る
 の
 だ
 素より
 素
 しい
 内情を知り
 秘山は
 露探
 び
 っ
 ち
 ぐ
 あり
 差違へて
 ぶ
 ん
 で
 る
 の
 だ
 秘山が
 正直
 の
 だ
 を
 聴
 っ
 て
 くれ
 ば
 ち
 ん
 て
 り
 ぶ
 友
 人
 の
 ニ
 ミ
 有
 る
 の
 だ
 みる間日
 士
 あり
 け
 る
 の
 だ
 秘山は
 露探
 び
 の
 だ
 正直
 の
 だ
 を
 聴
 っ
 て
 くれ
 ば
 ち
 ん
 て
 り
 ぶ
 友
 人
 の
 ニ
 ミ
 有
 る
 の
 だ

大分、新聞の激務で頭脳を悪くしてつん
 ので、三百を任を辞して、単に小説だけ
 としふ事あり、十一月二十三日、新聞
 業の行方半島は目撃行脚を試みたら、時
 日二六の社員としふが、露探視されて、
 感しん
 け
 後
 子
 ん
 ぶ
 果
 合
 ぶ
 の
 だ
 征
 妹
 の
 嫁
 入
 っ
 て
 る
 の
 だ
 上
 村
 翁
 輔
 へ
 海
 軍
 中
 將
 の
 だ
 酒
 ぐ
 お
 ど
 し
 つ
 け
 る
 の
 だ
 事
 も
 有
 る
 の
 だ
 何
 処
 へ
 行
 っ
 っ
 っ
 頭
 は
 上
 ぶ
 ぶ
 の
 だ
 軍
 人
 全
 盛
 時
 代
 の
 文
 士
 露
 探
 系
 と
 来
 て
 は
 実
 の
 悲
 哀
 を
 捉
 め
 る
 の
 だ
 有
 る
 の
 だ

26

祝友社中は 青山の 墓地の跡で以後。

挿入

居すくみて霜を痕おく候哉

虚心

ありふしや墓の道の霜柱

小波

染めてしか後を去年の玉木り塚

眉山

白雪の山を彩る 紅梅の枝

九草

懐手がはらぶさうりて 柳を繋ぐ哉

柳林

世に人の心も猶紅葉とや

水蔭

去年の今頃思ひて見えぬ

思葉

夢の跡ありてぬしの顔

年末の仕事とては

文藝倶楽部 の

入日 胡

A 10 20 書 三三四

蝶の舞の といふ脚本を書いて送つて 後日、

そらを上より示しはじめ、

これと云つて来り。それで自分はおせ口を繕め

る事は出来たけれど、自分の筆を自分で繕め

りしめると怪氣焰を吐いて事が有つた。

この日の影に上演

明治三十八年の春

明治三十八年の初春、自分とては別

に変つた事もおかつた。二日の紙上に出る

275

とては珍しく、^{取て}い事で、いので、放棄して置く
た。へけ後と亦、自分の ^日大暗礁 ^日も同程同人
で無断興行
三月八日の夜、上野三宜亭（今は焼けて無
い。摺鉢山の前）田村西男の家で、合樞社
の文士劇が有つて、見物に出掛けんが、来賓
の中、依田学海翁が来て、野口米次郎の ^日輕
薄 ^日ある日本 ^日と就て憤慨して ^日ソシ ^日ある日本
がいやふの ^日より早く米國へ返す ^日好い。
旅費 ^日無い ^日より、 ^日あり ^日材 ^日橋 ^日を ^日海 ^日の中へ

No. _____

る天外の ^日に世紫 ^日の ^日二十回で完結する ^日終
ゆふ、其後へ自分の小説を書く事 ^日あり ^日海
賊の子 ^日と ^日冒険 ^日物 ^日の ^日恋愛 ^日味 ^日を加へ ^日男
性的小説である ^日といふ事 ^日を、 ^日年 ^日末 ^日の ^日紙 ^日上 ^日で
豫告 ^日し ^日の ^日が、 ^日天外 ^日は ^日新年 ^日の ^日入 ^日つ ^日て ^日か
休筆勝心 ^日却々 ^日大團圓 ^日の ^日到 ^日ら ^日ず。 ^日社 ^日の ^日方 ^日で ^日困
つて ^日る ^日が、 ^日それ ^日に ^日け ^日自分 ^日は ^日休養 ^日が ^日出 ^日来 ^日る ^日
で、 ^日相 ^日寄 ^日ら ^日お ^日採 ^日集 ^日る ^日出 ^日歩 ^日い ^日て ^日る ^日ん。
二月十四日 ^日初 ^日日、 ^日開 ^日盛 ^日座 ^日の ^日中 ^日野 ^日信 ^日近 ^日一 ^日部 ^日で、
自分の ^日秘密 ^日世界 ^日を ^日無 ^日断 ^日興 ^日行 ^日。 ^日この ^日時 ^日代
^日宮 ^日古 ^日郎

A 110 20 第三回 依田学海

No. _____

27 I

けて来た。素より藝は未熟で有つたし、それ
 松居松葉の「エル、ナニヤ、巖谷小波
 の「瑞西義民傳」など、其時代としては新
 りい狂言を出したるも、見物が薄くて困る
 ので、今度日本物の新作を演じて欲しいといふ
 ので有つた。
 脚色者は竹柴香葉で有つた。七草中十三
 草で、大切な「野郎枕物語」といふのを演
 じた。四月五日の開場、其土間一人か八丁鉄
 といふ字牌行。其土間一人か八丁鉄

抛り込んでやる。と怒り出した。暗い暗い
 であら。其頃評判の婦人記者の
 本庄幽蘭女史といふ、
 谷川東が追ひ廻はさうして、待つてあるの
 時
 有つた。海賊の子は紙上舞の出し
 三月十一日、一回毎に六号文で註釋を附けた
 け月の某日、明治座の河原山権之助が来訪
 して、自分の「海賊の子」を「遊牛一齣」で演じ
 させて見せると頼むのであつた。
 遊牛は今の「團次」で、先年父を失ひ、若
 年で明治座の「孤島」を演じて、是を以て奮闘をつ
 び

A 10 20 青心 三河原宗徳

海賊の子は紙上舞の出し
 三月十一日、一回毎に六号文で註釋を附けた
 け月の某日、明治座の河原山権之助が来訪
 して、自分の「海賊の子」を「遊牛一齣」で演じ
 させて見せると頼むのであつた。

29 I

1 幸免蒙らうと来る事書割を見る月を見る
 2 より日明のあるを心得て居ては存せしめり
 3 念也を食つちりも餘り智者であしと脚色
 4 の事は一切略(中略)延針の右郎は總ド
 5 て無事の出来まゝが物語の件などは引立
 6 ちたり千鶴と再會の場は情合見えたり。
 7 考調の松ヶ枝ボイヤリと顔粧へ例のキ
 8 千く〜と〜を隠せしはよし。女寅の
 9 千鶴は身分がけは際立ちて目も着きたり
 10 色氣の無月抄松ヶ枝の中は色氣あり太郎を取

No.

ネ 五

1 延針の劇評は 二六 四月十三日の載
 2 鬼太郎の劇評は 二六 四月十三日の載
 3 せもれん。
 4 (前略)一番目は大甘子あるが大幸子ある
 5 お中甘の中辛下戸の上戸も向く物不
 6 此は天下の名劇これ一ツと吹聴しけれ
 7 とい水陸路随分の旅も曲りゆる手前存せしめ
 8 延針の劇評は 二六 四月十三日の載
 9 鬼太郎の劇評は 二六 四月十三日の載
 10 せもれん。

A 10 20 青い 三河海紙皮巻

延針の劇評は 二六 四月十三日の載
 鬼太郎の劇評は 二六 四月十三日の載
 せもれん。

又秀葉も来ては全くが薩で明治の
 但し脚本料
 感謝
 紋羽三重
 手
 土産子持うて来た
 何と無い。

505

白詞の中は有るが、
 柳の下は我は捨子と
 又どうか何の好い種を
 自分は何と
 柳の下は簀はるふいぬ
 柳の下は我は捨子と
 又どうか何の好い種を
 自分は何と
 柳の下は簀はるふいぬ
 柳の下は我は捨子と
 又どうか何の好い種を
 自分は何と

No. _____

五

追りて泣く水あどホロリとささるり。小。
 團次の弾正は滅法立派な二後山中より
 五九郎と云ふべし。藤六は無事。外若の
 千鶴の母は...
 新聞の場は安宅の浄瑠璃然と演じて見せ
 再會、合戦、大詰書...
 又どうか何の好い種を
 自分は何と

A 1620 書 三回

No. _____

ので有らん。

仕方よく苦笑いをして

延外

~~延外~~

らん

らん

らん

らん

らん

ろけがな

斯ういふ

脚本

有るらん

かと

そ

そ

此をキツカケ

て

ア

ア

ア

ア

ア

の器用な事は

絶体

自分

は

出

事

あ

らん

。



